

INTERVIEW

インタビュー 陣内秀信

『世界水の都』



陣内秀信氏

法政大学工学部教授 1947年福岡県生まれ。
東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。著書
に『東京の空間人類学』『都市を読む - イタリア』
『ヴェネツィア 水上の迷宮都市』他多数

「日本の水の都としてどこをイメージしますか？」という質問がありました
(10頁) では、世界の水の都というと、皆さんはどこを思い浮かべるでしょ
うか？ 法政大学教授の陣内秀信氏にうかがってみました。

僕が選ぶ世界水の都 十都

まず、ヴェネツィア(イタリア)、そしてその大陸側のヴェネト地方の町トレヴィーゾ(イタリア)。近郊の農村部がベネトンの発祥地ということでも有名な所です。ヴェネツィアに隠れていますが、知られざる水の都です。

ミラノ(イタリア)も東京と同じ様に水のネットワークを張り巡らせていた都市です。たとえばドウオモ(大聖堂)の石は舟運で運んできたものです。でも、近代化の過程でかなりの運河を埋めてしまい、今は幸い三系統だけ残っています。それをナヴイリオといいますが、そこが、今やロンバルディア地方の若者が週末に押し寄せるたいへんな賑わいの地になっています。

それと、ブリュージュ(ベルギー、現地名はブルツヘ)。ここは、ヴェネツィアを追いかけるように発展し、経済中心となった中世都市の代表で、やはり運河が巡っています。現在では、実用的な水運はほとんどなくなりましたが、観光船で周遊でき、北のヴェニスと呼ばれています。

このブリュージュの繁栄を受け継ぐ形で、水の都として君臨したのが



ブリュージュ(ベルギー)



蘇州(中国)



ニューヨーク(アメリカ)

アムステルダム(オランダ)です。ヴェネツィアからブリュージュ、そしてアムステルダムに至る系列は、ヨーロッパの都市の歴史を語る上で欠かせないものです。おもしろいのは、ちょうどアムステルダムと江戸がほぼ一七世紀の同時期に大々的に形成されている点です。

これまで選んだのは、都市の中に運河が巡っている「水網都市」(上田篤・京都精華大学教授が、こう命名しています)です。これと異なるのが、イスタンブール(トルコ)。ここは、海と湾、海峡という三つの水域が町に面しています。イスタンブールは旧市街と金角湾をはさんで北にある新市街(新市街といってもジェノヴァ、ヴェネツィアといったヨーロッパ系の人々がいた古い町を核とする所で、近代にできた経済中心地になっています)。そして、東側の小アジアとの間にボスポラス海峡が位置し、船が三つのエリアを行き交っています。



バンコク(タイ)



ジャカルタ(インドネシア)

舟運は活発、橋も印象的で、水域をはさんだ対岸を見る風景というのが非常に印象的です。坂が多い、斜面都市なので、水を見るパノラマが昔から尊重されて、海が見えるアパートは家賃が倍になるといってす。

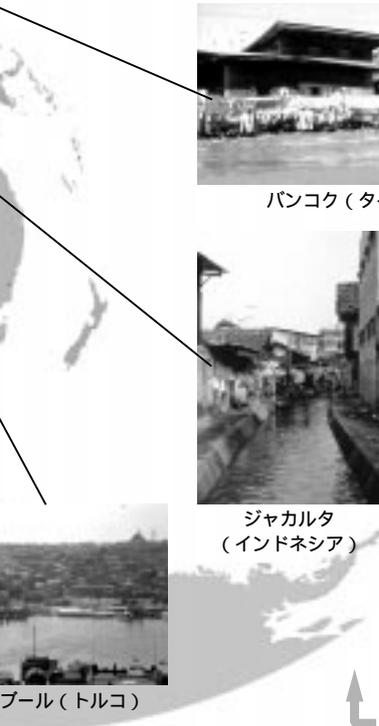
アジアに目を向けると、やはり蘇州(中国)。マルコ・ポーロが「自分の故郷の町のヴェネツィアに似ている」と言ったので、東洋のヴェニスと言われています。でも、中国人に言わせると「ヴェニスよりも蘇州の方がずっと古い。ヴェニスこそ西洋の蘇州だ」と言いますね。水の都市の本家の様な所で、一二世紀に書かれた地図を見ても、中世の段階で現在に受け継がれている水の都市の骨格が、完全に出来上がっていたことがわかります。これも水網都市です。

同じ水網都市としてバンコク(タイ)があります。だいぶ運河を埋めたとはいえ、今でも非常に感動するような水の都です。何よりも、水と生活の距離が一番近い。人の生活が水に非常に近い。水の中に入り体を洗ったり、水上に家造ったりしています。

それと、ジャカルタ(インドネシア)も、かなり掘



ブル(トルコ)



割りや運河を埋めてしまった水の都ですね。もともとオランダが作ったパタヴィアがコアになっていて、その周辺に中国人が住む町、さらに地元のイスラム教徒が住んでいる、カンポンという庶民地区がある。路地を巡らした高密な空間なんですけど、それらのエリアを区切るのに運河が巡っています。おもしろいのは中心部の元パタヴィアだったエリアはオランダ人が作っているんで、アムステルダム都市の風景と似ている。跳ね上げ橋があったり、のこぎりの刃のような屋根の煉瓦造りの家が並んでいる。ニューヨークもはじめはオランダ人が入植したので、運河を造って、アムステルダム風の建物が並んでいたことが古い鳥瞰図で分かっています。つまり、オランダ人が大航海時代に世界中に水の都を移植してきたわけです。ニューヨークの場合はその後、イギリス人が受け継いだので運河を埋め、陸の町にしてしまいましたが。

そのニューヨーク(アメリカ)は、実は新しいタイプの水の都です。水網都市ではない。半島のようにマンハッタンが突き出し、両側にハドソン川とイースト川の二つの川が流れ込んでいて、三面を水に開いています。しかも川の幅が広い。東の対岸を結ぶブルックリン橋など非常に勇壮な橋が一九世紀末に建設され、橋と大きい水域が作り出され、同時に高層ビル、摩天楼といった象徴性をもった近代初期特有の大規模な水の都市ができあがっていきました。そして、港湾では、近代の特徴でもある桟橋が突き出し、多数の船が行き来してしましました。現代の港の原型です。船が大型化する



アムステルダム(オランダ)

につれ、桟橋も大型化し、桟橋が何十も並ぶという壮大なウォーターフロント景観が、作り出されていきます。自由の女神も水の都市を意識しているわけですから、対岸に作り、それを展望する。そしてそこに皆が行き、マンハッタンを反対側から展望する。アメリカ人は、船で新大陸にたどり着いたという歴史があり、帆船のイメージを自らのアイデンティティ・イメージとしてもっています。ですからウォーターフロントが再生されると、港にメモリアル・オブジェとして帆船を置くというケースが多い。一九七〇年代終わり頃から古い港湾を再開発するウォーターフロント再生という動きが活発になってきますが、近代港湾都市的に水に開かれた空間が、老朽化し再開発を経て、今また市民に開かれていっている。水の都市が成長している格好の例だと思えます。

水の都とは

世界と日本の相違

僕が今挙げた中で、世界の人が一般に水の都として挙げるのは、ヴェネツィア、フ



ミラノ(イタリア)



トレヴィーゾ(イタリア)



ヴェネツィア(イタリア)



イスタン

リユージユ、アムステルダム、蘇州、バンコクの五都市だと思えます。逆に、今回、意図的に挙げなかったのは、大きな河川が一本、町の真中をゆったりと流れていて、両側に歴史的な町が展開しているという都市です。このパターンは非常に多い。日本では、例えば京都や仙台などが良い例でしょう。日本では水の都というと、これらが上位に来ているのが面白いですね。(10頁)

やはり、日本人は、川に情緒性を感じているのでしょ。河辺には自然があります。ところが、ヨーロッパの川というと、その両側にきっちり人間がモニュメントなどの構築物を作っていく。例えば、代表はパリですが、シテ島にノートルダム寺院を造り、裁判所をつくり、川沿いにルーブル宮を作る。そして両岸を石の橋が結んでいる。「人工物で固めたダイナミックな景観」これが水の景観ですね。彼らは、緑が多いとか、季節によって表情が変わるといった意味での水の景観意識は少ないと思います。

日本の場合は、季節によって、川沿いの表情が変わります。水場の宗教性もありますし、盛り場や遊びの空間ができ、開放的な広場として水辺を使ったりしていきます。日本の川には自然のイメージが入らないと、水の景観にならないのではないかと。それに、日本の川は暴れ川だから、流れてしまい、安定しない空間なわけです。誰もそこにモニュメントを作ろうとは思わない。変わりゆくうつろいゆく、はかなさがないのではないですか。

しかも河原は、ヨーロッパの河川にはあまりありません。河原には流れ者が集まったり、遊郭、料亭など、自由空間ができやすかった。コミュニティの安定した土地に立脚した制度が陸の方にあるとすれば、川の方にはある種の自由空間があり、アウトローが集まりやすい。そこにモニュメントを作ろうとは誰も思わないわけです。河辺の空間といっても、ヨーロッパの様にパブリックな空間として構築される場合もあれば、日本の河原のように、庶民の民衆的な空間が息づいてきた場合もあるわけです。

